

## 中学校・高等学校教科書における日本町所在地と朱印船航路

大平 晃久（長崎大学教育学部）

### I はじめに

近世初期の日本町と朱印船は、中学校社会科歴史的分野、高校地理歴史科日本史 B、世界史 A、世界史 B の教科書で扱われ<sup>1)</sup>、よく知られている。しかし以前から、永積、桃木によって、教科書の日本町や朱印船の説明には明らかな誤りや今日の研究からみておかしい点があることが指摘されてきた。すなわち、永積は中学校教科書などにおける朱印船航路が誤ってあまりに遠方まで及んでいることを指摘した<sup>2)</sup>。また桃木は、日本町や朱印船に関して、日本史教科書における地名の不正確さ、朱印船寄港地の誤りなどを指摘している<sup>3)</sup>。これらのほかに最近では、中高（日本史、世界史）教科書を含む各種出版物における朱印船寄港地などの地名の誤りについて指摘した久礼の研究<sup>4)</sup>もある。

ただし、これらは断片的な指摘にとどまっており、久礼による研究を除けば、現行学習指導要領以前の教科書に関して述べられたものである。中高の教科書をより広く対象とし、日本町や朱印船がどう取り上げられているか、どう取り上げられるべきか検討する必要がある。

本稿では、現行学習指導要領<sup>5)</sup>のもとで刊行された中高教科書を旧版（前学習指導要領<sup>6)</sup>に基づく教科書）と比較しつつ、日本町が所在した都市、朱印船の目的地や寄港地、航路について検討する。対象とした教科書は、東京書籍、山川出版社、帝国書院の3社（以下、それぞれ東書、山川、帝国）から刊行された中学校社会科歴史的分野、高校地理歴史科日本史 B・世界史 A・世界史 B・地図の全て（ただし、地図（帳）は、日本史・世界史の内容を含むもののみ）で、現行版が17冊、旧版が18冊になる。3社は中学校歴史、高校日本史 B・世界史 B、高校世界史 A でそれぞれ近年シェア1位の教科書を刊行しており（東書『新しい社会歴史』、山川『詳説日本史』・『詳説世界史』、帝国『明解世界史 A』）、その他にも中高の校種、科目をまたいで複数の教科書を出している。3社の教科書を対象にすることで、シェア1位を含め、特に高校について幅広い教科書を検討の俎上に載せることが可能になる。以下、II章で中学校歴史と高校日本史 B、III章で高校世界史 A・B、地図についてみていく。

### II 中学校歴史・高校日本史 B 教科書の検討

(1) 3社の教科書記述 中学校歴史と高校日本史 B の教科書における日本町と朱印船航路の記述を表1で比較した。なお、東書『日本史 B』は旧版のみ（現行版刊行なし）のため網掛けにして示している。他の教科書は現行版と旧版で記

表 1 中学校歴史・高校日本史 B の各教科書における日本町・朱印船の記述

教科書 出版社名・書名 (検定年)	日本町		朱印船航路		
	記述 有無	地名	地図 有無	遠方渡航先	中国 (マカオ 以外) 渡航先
東書『新しい社会 歴史』(2011)	○	ディラオ, サンミゲル, ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ	○	[テルナテ], [ブルネイ], マラッカ	ニンボー 寧波, 漳州
帝国『社会科中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』(2011)	○	マニラ, [ルソン島2か所], ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ	○	テルナテ, ブルネイマラッカ	ニンボー 寧波, [漳州]
山川『詳説日本史』(2012)	○	ディラオ, サンミゲル, ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ, アラク	○	マロク, ブルネイ	—
山川『新日本史』(2013)	○	ディラオ, サンミゲル, ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ, アラク	○	マロク, ブルネイ	—
山川『高校日本史 改訂版』(2017)	○	ディラオ, サンミゲル, ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ, アラク	○	マロク, ブルネイ	—
東書『新選日本史 B』(2017)	○	ディラオ, サンミゲル, ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ	○	「日本船」チドール, アンボイナ, マカッサル, [ブルネイ], バタヴィア, マラッカ	「日本船」ニンボー 寧波, [漳州]
東書『日本史 B』(2003)	○	ディラオ, サンミゲル, ツーラン, フェフオ, プノンペン, ピニャルー, アユタヤ	○	チドール, ブルネイ, マラッカ	信州

東書『日本史 B』は旧版。他の教科書は現行版と旧版で記述は変わらないため旧版は記載していない。地名の〔 〕は地図で位置が示されるのみで地名が明記されていないもの。

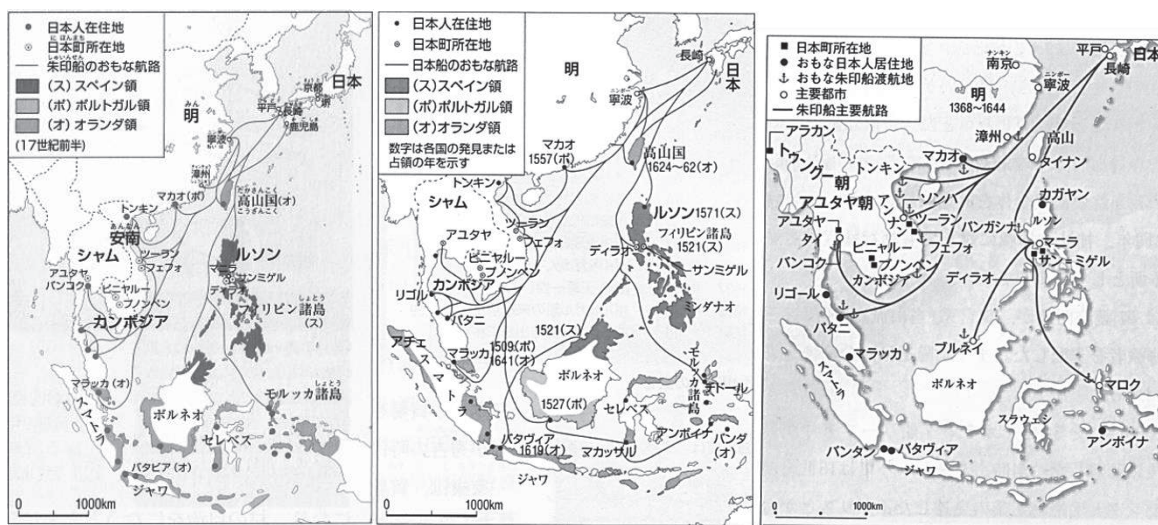


図 1 東書中学校歴史掲載図 図 2 東書『新選日本史 B』掲載図 図 3 山川『詳説日本史』掲載図

述に違いはなく、旧版は記載していない。

東書は中学校歴史、高校日本史 B でよく似た図を用いており (図 1・図 2)、日本町は同じ 7 か所である。しかし朱印船については異なり、『新選日本史 B』では「日本船」としてかなり遠くまで達する航路を示している。

山川は高校日本史 B を 3 種刊行しているが、すべて同じ図であり (図 3)、本文中の説明も似ている。日本町は東書より 1 つ多い 8 か所である一方、朱印船航路は東書よりも短い。

帝国は中学校歴史を刊行している。日本町はマニラが加わりルソン島だけで

3 か所、その他は東書  
中学校歴史とほとんど  
同じである。

## (2) 日本町所在地

日本町の所在地につ  
いては、東書の教科書  
が7か所をあげるのに  
対して、アラカンが加  
わった8か所か(山川)、  
あるいは、マニラが加  
わるか(帝国)という  
違いがある。これら教

科書における日本町の記述は、戦前戦後  
に日本町研究をリードした岩生成一の強  
い影響下にあるといつてよい。上述した  
桃木は、歴史教育における日本町や朱印  
船の記述について、「戦前戦後の岩生成一  
の研究...はいまだに乗り越えられていな  
い」と述べている<sup>7)</sup>。すなわち、上記の  
日本町7か所と8か所の違いは、岩生の  
『南洋日本町の研究』<sup>8)</sup>(7か所を提示、  
図4)に基づく(東書)か、『朱印船と日  
本町』<sup>9)</sup>(8か所を提示、図5)に基づく  
(山川)かという違いであるとさえいえ  
る。帝国については後述する。

中学校歴史と高校日本史Bの教科書で  
扱われるこれら7か所ないし8か所の日  
本町のうち、アラカン、ディラオ、サン  
ミゲル、ツーランについては問題がある。  
まずは、山川の各教科書において日本  
町に含められているアラカンであるが、  
この「アラカン」は王国名であり、日本  
町所在地として正しくはミャウーとよぶ  
べきであろう。岩生はこのミャウーにつ  
いて、その当時のカトリック布教者2人  
の報告に主によりつつ、「我が商船は全  
然渡航しなかったようである」こと、日  
本での迫害を逃れた「切支丹信徒も多く」、  
また「国王の親衛隊に勤務する者も少  
なくなかった」ことを述べている<sup>10)</sup>。  
しかし、それ以上の検討は、管見の限  
りこれまで行われていない<sup>11)</sup>。さら  
に、このミャウーは教科書的な日本町  
の定義とはずれがある。すなわち、山  
川『詳説日本史』では日本町について  
「朱印船貿易がさかんになると、海外  
へ移住する日本人も増え、南方の各地  
に自治制をしいた日本町が生まれた」と  
示している。次章で検討

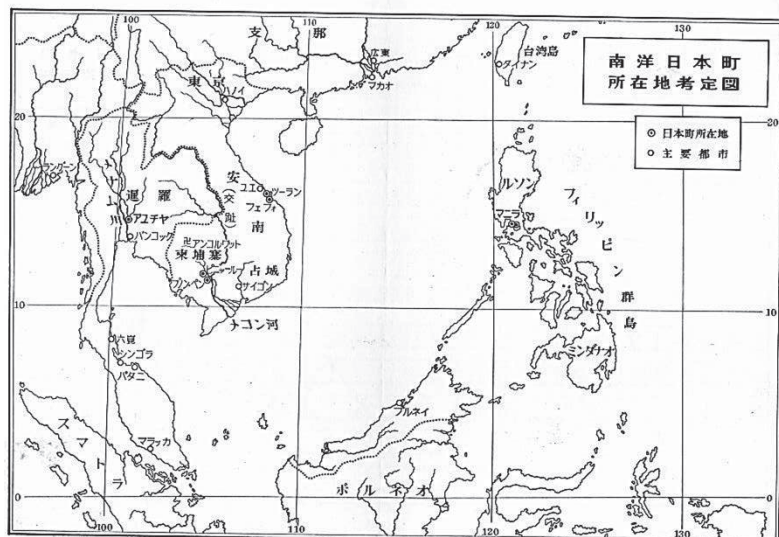


図4 岩生『南洋日本町の研究』掲載図

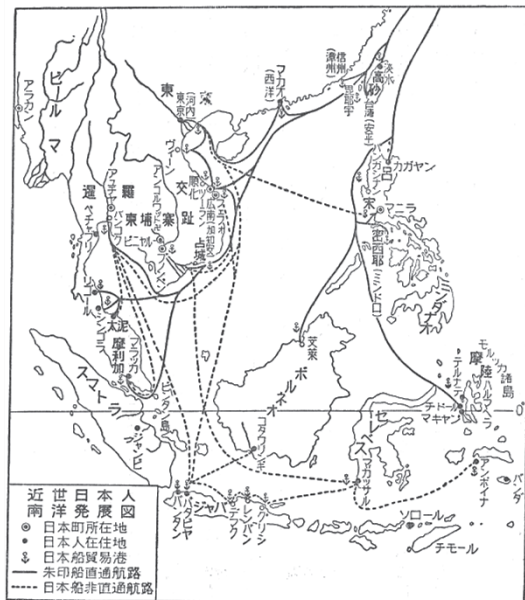


図5 岩生『朱印船と日本町』掲載図

本文中ではマニラではなくディラオ、サンミゲルとして説明されている。

する世界史教科書のうち、帝国世界史 B ではより明確に、「…徳川家康は、認可を与えた朱印船を台湾・マカオや東南アジアに渡航させて現地の中国商人と交易させた。貿易拠点の港市には居留地ができ、東南アジアでは日本町が、九州では唐人町が栄えた」と示している。しかし、ここミャウーにおける日本人の居住は貿易とは全く関係がなく、少なくとも典型的な日本町とはいえない<sup>12)</sup>。

次に、表 1 のすべての教科書で日本町所在地とされたディラオとサンミゲルについて検討する。図 1～3 では、ディラオ、サンミゲルはマニラとは別の都市で、互いにかなり離れているように見えるが、実際にはマニラの中心部で、しかも近接している。ディラオ、サンミゲルの正確な位置については諸説あり、確定しているわけではないが、岩生の説では図 6 のようになる。マニラの旧市街イントラムロスの城壁からわずか 200～500m ほどしか離れておらず、しかも両者は隣接した位置である。すなわち、ディラオ、サンミゲルの 2 つの日本町があったというよりも、マニラに日本町があり、細かく示すならば 2 つの地区からなっていたとみるべきである<sup>13)</sup>。

アユタヤの日本町跡は旧市街のある川中島から 1.5km ほど離れているが、「アユタヤ日本町」とよばれてきた一方で、ディラオ、サンミゲルをマニラと別の町のようにとらえるのはおかしい。アユタヤなど他の日本町は日本町のあった都市名でよばれるのに対し、マニラのみ日本人が集住した地区名でよぶのはずれがある。なお、以上をふまえると、マニラ、ディラオ、サンミゲルの 3 か所に日本町があったとする帝国中学校歴史は論外であることが理解されよう。

3 つ目に、これも表 1 の全教科書で日本町所在地とされているツーランは、今日では日本町所在地とはみなされていない。ツーランに日本町があったとされたのは、「茶屋新六交趾渡海図」という絵図に描かれた日本町がツーランであると考えられたためであった<sup>14)</sup>。名古屋の豪商で朱印船貿易商であった尾張茶屋家の朱印船航海を描いたこの図は戦前からよく知られ、昭和初期には高等小学校国定国史教科書の挿絵にもなった<sup>15)</sup>。ただし、この絵図は断簡の集成であり、描かれた日本町がツーランだと明示されているわけではなく、岩生もツーランを「一時的仮泊の港町」と位置づけていた<sup>16)</sup>。今日では、この絵図はフェフォ（正しくはホイアン）日本町を描いたものと考えられており、ツーランが日本町の所在した交易港であったことは否定されている<sup>17)</sup>。

その他、所在地の位置そのものではないが、日本町所在地として教科書にあげられた地名にも問題がある。上でみた、ツーランとフェフォは、現在の地名でも、日本町が存在した 17 世紀当時の地名



図 6 ディラオとサンミゲルの位置

岩生の記述による。ベースマップは Yahoo 地図。

①：高山右近像 ②：内藤如安記念碑

でもない。よく知られる「ユエ」(フエ)<sup>18)</sup>と同じく、フランス植民地体制下の地名であり、日本で日本町が広く研究された時期の地名、岩生が論文や著書で用いた地名である。ツーラン、フェフォは現在のダナン、ホイアンであり、17世紀にはそれぞれ、クアハン、ホイアンとよばれていた<sup>19)</sup>。教科書に限らず、日本町の所在地としては「クアハン(ダナン)、ホイアン」のように、当時の地名に現在の地名を括弧つきで表記するか、あるいは、よく知られた異称としての植民地期の地名をさらに付け加えて、「クアハン(ダナン、ツーラン)、ホイアン(フェフォ)」と表記するべきである。ただし、上述のようにクアハン(ダナン、ツーラン)に日本町はなかったと考えられている。

(3) 朱印船航路 中学校歴史と高校日本史 B の教科書の朱印船航路も、日本町と同じく岩生に依拠している。東書中学校歴史(図 1)、帝国中学校歴史、東書『日本史 B』(旧版)の朱印船航路は岩生の『朱印船と日本町』にある図(図 5)ほぼそのままである。ただし細かくみれば、マルク諸島の目的地がテルナテかチドール(正しくはティドレ)かという差はある。遠方まで航路が伸びている東書『新選日本史 B』(図 2)は朱印船ではなく「日本船のおもな航路」となっており、やはり図 5 とよく似ていることがわかる。ただし、朱印船ではなく日本船であるというのは、「日本船」の定義が不明であることも加わり、誤解を招こう。

教科書の、特に図に示された朱印船航路について、2つの大きな問題点を指摘しておきたい。1つは、朱印状に記された渡航先のみをそのまま渡航先とはみなせないということである。永積は朱印状の発給について、特定の地名に集中するのを避けてほとんど知られていない地名を選んだ例が何例もあること、マカオ以西の現在のベトナムなど広い地域を指す「西洋」宛てが初期に 18 例もあること、途中で別の港に寄る例もあることなどを示し、「慶長から元和の初期には、朱印状の渡航先のいかにかわらず、西洋やマニラに渡航した朱印船がもっとも多かったのではなかろうか」と述べている<sup>20)</sup>。朱印状の渡航先は傾向しか示さないとみるべきであろう。

表 1 に、各教科書の図で朱印船航路が遠方ではどこに達しているかを比較した。永積は、オランダ平戸商館長の報告を引用して、朱印船の渡航先は「マニラ、交趾シナ、カンボジア、シャム、パタニ(大泥)など」にほぼ限定されていたと述べている<sup>21)</sup>。「摩陸」(マルク)、「摩利伽」(マラッカ=メラカ)宛て朱印状は 1 例ずつ、「芟菜」(ブルネイ)は 2 例のみで、発給自体が例外的であり、実際に渡航した確証はないことを考えると、教科書の図に航路として示すべきではないだろう。一方、図 1 のように、マニラに航路が達していないのは問題である。また、発給朱印状・実際の渡航記録ともに多く、タイオワン事件(1628 年)でも知られる、「高砂」(ゼーランディア、安平)を無視している図 3 も問題がある。

もう一つの問題点は、朱印船が中国本土に行っていることのおかしさである。当時、明は対日本で海禁政策をとっており、だからこそ明の域外で中国商船と日本商船が取引を行う出会貿易がおこなわれ、日本町ができていた。多くの教科書

の図に描かれた、寧波<sup>ニンポー</sup>、漳州<sup>ジャンジョウ</sup>への航路は、明らかに問題である。

寧波は朱印状の渡航先ではなく、岩生の図にもない。教科書の図でここに朱印船航路が延びているのは、寧波沖合の舟山群島<sup>ヂョウシヤン</sup>が後期倭寇以来の密貿易拠点であったためだろう。寧波に船が入っているように描いては誤りである。一方の漳州は、朱印状の渡航先には「信州」とあるものである（表 1 に示したように「信州」と表記した教科書もある）。岩生らの研究によって信州は漳州であるとされ、それが引き継がれてきた。しかし、現在では信州を「新州」とする中村説<sup>22)</sup>が有力で、中島は中村説に基づき、「信州」をベトナム中部クイニョン付近に比定している<sup>23)</sup>。「信州」宛て朱印状はごく初期の 1604（慶長 9）年に 2 例あるのみで、いずれにせよ、教科書の図に朱印船渡航地として示される必要はなかろう。

### Ⅲ 高校世界史教科書の検討

(1) 中学校歴史・高校日本史 B との異同 世界史 B でシェア 1 位の山川『詳説世界史』には、日本町所在地や朱印船航路に関する記述がほとんどない。それだけに目を奪われると、高校世界史教科書ではほとんど議論すべきことがないようだが、そうではない。表 2 に示したように、高校世界史教科書における記述は、中学歴史・高校日本史に比べて多様である。高校地図帳（歴史的内容を含んだもの）も含めて、出版社ごとにみていきたい。

まず、山川では、世界史 B が 3 冊とも同じ記述である一方、世界史 A は 3 冊 3 様で、旧版から大きな変化もある。『現代の世界史』（現行版、旧版）の「ルソン、タイ、ジャワなど各地」に日本町ありという記述のうち「ジャワ」は、日本町としてマニラ、フェフォ、プノンペン、アユタヤの 4 か所のみを示す同書旧版の地図と矛盾しており、誤記だろう<sup>24)</sup>。朱印船航路は詳しく扱われておらず、山川で唯一、地図で日本町と朱印船航路を示した『世界の歴史』旧版は、山川の日本史ではなく、他社の中学校歴史、高校日本史 B に似た内容であった。

東書でも同様に、朱印船の航路は詳しく扱われない。『世界史 A』と『新選世界史 B』はよく似た図を用いており（図 7）、「日本町と日本人居住地」としてホイアンが示されず、（ディラオ・サンミゲルではなく）「マニラ」があげられている。一方、『世界史 B』の日本町を示した図は、内容的には同社の中学校歴史・高校日本史 B と同じといってよいが、フェフォではなく「ホイアン」と表記している。

帝国では、世界史 A の旧版で日本町・朱印船が全く扱われていなかったのが現行版では扱われるようになった。しかし、上でみたように問題のある、同社中学校歴史と同じ図が用いられている。一方、世界史 B の日本町の扱いは特徴的で、地図には表示されないが、本文中で「マニラ（フィリピン）、ホイアン（ベトナム）、アユタヤなど」と 3 か所のみ明記されている。この地名表記は旧版以来であるが、旧版にはあったダナン（ツーラン）を日本町に含めるという問題は解消された。一方で、朱印船航路は同社の中学校歴史と似ており、問題がある（図 8）。

なお、帝国は高校地図帳のうち 1 種類を日本史・世界史でも使えるように歴史

表 2 高校世界史 A・同 B・地図の各教科書における日本町・朱印船の記述

教科書 出版社名・書名 (検定年)	日本町		朱印船航路		
	記述 有無	地名	地図 有無	遠方渡航先	中国（マカオ 以外）渡航先
				地図無しの場合、渡航先の記述	
帝国『明解世界史 A』 (2016)	○	マニラ, [ルソン島 2 か所], ツー ラン, フェフオ, プノンペン, ピ ニャルー, アユタヤ	○	テルナテ, ブルネイ, マラッカ	寧波, [漳州]
帝国『明解世界史 A 最新版』(2003)	×	—	×	—	—
山川『要説世界史改訂 版』(2017)	○	「東南アジア各地」	×	「東南アジア各地」	—
山川『世界の歴史改訂 版』(2016)	○	ホイアン	×	—	—
山川『世界の歴史改訂 版』(2006)	○	[ダナン], [ホイアン], プノン ペン, [ピニャルー], アユタヤ	○	[テルナテ], アンボ イナ, [ブルネイ], バ タヴィア, マラッカ	[上海], 漳州
山川『現代の世界史 改訂版』(2016)	○	「ルソン, タイ, ジャワなど各地」	×	「交趾国 (ベトナム)」	—
山川『現代の世界史』 (2002)	○	(本文)「ルソン, タイ, ジャワ など各地」(地図) マニラ, フェ フオ, プノンペン, アユタヤ	×	—	—
東書『世界史 A』 (2012)	○	「日本町と日本人居住地」マカ オ, マニラ, プノンペン, アユタ ヤ, マラッカ, バンテン	×	—	—
東書『世界史 A』 (2003)	○	「日本町と日本人居住地」澳門, マニラ, プノンペン, アユタヤ, マラッカ, バンテン	×	—	—
山川『詳説世界史』 (2012)	○	「東南アジア各地」	×	「東南アジア各地」	—
山川『新世界史 改訂 版』(2017)	○	「東南アジア各地」	×	「東南アジア各地」	—
山川『高校世界史 改 訂版』(2017)	○	「東南アジア各地」	×	「東南アジア各地」	—
帝国『新詳世界史 B』 (2017)	○	「マニラ (フィリピン), ホイア ン (ベトナム), アユタヤなど」	○	[ティドレ], ブルネ イ, マラッカ	寧波, [漳州]
帝国『新編高等世界史 B 新訂版』(2002)	○	「日本町ができた主な都市」マニ ラ, ダナン, ホイアン, プノンペ ン, ピニャルー, アユタヤ	○	[アンボン?], マカッ サル, ブルネイ, バタ ビア, ジョホール	寧波, 漳州
東書『世界史 B』 (2016)	○	[ルソン島 2 か所], ホイアン, [ダ ナン], プノンペン, [ピニャル ー], アユタヤ	×	「ベトナム, タイ, フィリピンなど」	—
東書『世界史 B』 (2002)	○	[ルソン島 2 か所], ホイアン, [ダ ナン], プノンペン, [ピニャル ー], アユタヤ	×	「ヴェトナム, タイ, フィリピンなど」	—
東書『新選世界史 B』 (2017)	○	「日本町と日本人居住地」澳門, マニラ, プノンペン, アユタヤ, マラッカ, バンテン, バタヴィア	×	「東南アジアなど」「アユタヤ」	—
帝国『地歴高等地図 現代世界とその歴史 的背景』(2013)	○	「おもな日本町」マニラ, [ルセ ナ?], ダナン (ツーラン), ホイ アン (フェフオ), プノンペン, [コ ンボンチャーム?], アユタヤ	×	—	—
帝国『地歴高等地図 現代世界とその歴史 的背景 新訂版』 (2002)	○	マニラ, ハイフォン, ナムディン, フエ, ダナン (ツーラン), ホイ アン (フェフオ), プノンペン, ピニャルー, アユタヤ, ペグー, マラッカ	○	テルナテ, ブルネイ, ペグー	寧波, 厦門

現行版と記述が異なる場合のみ、旧版を網掛けで表示。地名の〔 〕は地図で位置が示されるのみで地名が明記されていないもの。

的内容を含めて編集・刊行している。しかし、旧版に比べ現行版は改善されたものの、それでも問題が多い。ルソン島の 2 か所に日本町があり、しかも 1 つはマニラからかなり遠い町にあったようにみえること、同様に、ピニャルーに日本町

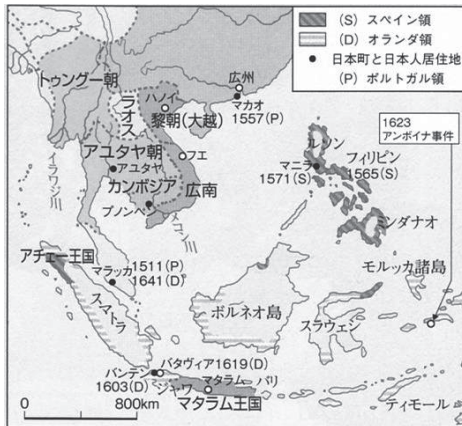


図 7 東書高校世界史 A 掲載図



図 8 帝国高校世界史 B 掲載図

があったと示すつもりなのかもしれないが、コンポンチャームにあったようにみえることなどが指摘できる。

(2) 日本町と朱印船をどう位置づけるか 以上みたように、高校世界史教科書の一部は、中学校歴史・高校日本史 B と似た図を用いており、それらと同様の問題が指摘できる。その一方で、いくつかの教科書では「ホイアン」や「マニラ」という地名表記がみられるという違いがある。さらに、日本町の位置づけについて、明らかに岩生の著書を離れるものがある。

帝国世界史 B 現行版では、繰り返しになるが、日本町所在地は「マニラ（フィリピン）、ホイアン（ベトナム）、アユタヤなど」と記述されている。主要 3 か所のみが「など」を付記して提示されており、日本町を完全には特定していない。

一方、東書『世界史 A』・『新選世界史 B』では、「日本町」と「日本人居住地」をまとめて、「日本町と日本人居住地」として地図で示している。ホイアンを含めていないという大きな誤りがあるが、やはり日本町を特定していないことに注目したい。

これらの教科書の記述は、前章の中学校歴史・高校日本史 B とは大きく異なる。すなわち、「日本町」は 7 か所ないし 8 か所あり、また、「日本町」はその他の（日本人が集住していない）「日本人居住地」とははっきり分けられるとみなしてきた、岩生の研究以来の日本町観から脱却するものである。日本町所在地を特別視せず、日本列島出身者が居住した多くの町と連続するなかにとらえているといえる<sup>25)</sup>。

このようにみると、日本町を非常に軽く取り上げた山川『世界の歴史』を、その軽さで評価することもできよう。この教科書は、旧版では日本町、朱印船ともに日本史なみに扱っていたが多くの問題があった。現行版では一転して、朱印船という用語もなく、日本町についてはホイアンを東南アジアの項で写真（ホイアンの日本橋）の説明として取り上げるだけである。

また、帝国世界史 B では、グローバルヒストリーをうたう同書らしく、「イスラーム勢力の拠点都市」「ポルトガルの拠点都市」「オランダの拠点都市」と朱印船航路が 1 枚の地図に示されており（図 8）、さらに旧版では日本町所在地もこの地図に含まれていた。永積は岩生の著書を評するなかで「朱印船貿易、あるいは

日本町を 17 世紀初期のアジア全体を展望して描き直せば、その役割、全体像がより鮮明に見えてくるだろう」と述べている<sup>26)</sup>。その視点からすれば、図 8 には日本町のみならず、華人の拠点都市（つまり主要チャイナタウン所在地）も示してほしいところである。こうした様々な勢力といったん並列にみることで、日本列島出身者の活動（朱印船、日本町）を一国史的ではなく相対化し、ダイナミックな動きの中にとらえることが可能であろう。世界史に限らず日本史でもこうした視点が望ましい。

以上の日本町所在地に対して、朱印船航路を地図で明示する世界史教科書は少なく、現行版では帝国の 2 冊のみである。朱印船貿易はともかく、その航路まで示すのは、あまりに「日本史」的だということだろうか。むしろ、朱印船航路が教科書に必須だといいたいのではない。朱印船を特別視する、しないに関わらず、上述したように、日本町所在地や各勢力拠点都市を示すだけで十分であるといえる。限られた史料をもとに航路を線で示すことはどうしても不正確さから逃れられないだろう<sup>27)</sup>。しかし一方で、航路が線で示された方がわかりやすいという考え方もできる。その場合、「おもな航路」と明示し、Ⅱ(3)で述べたように主要渡航先を選んで図に記入するしかなかろう。さらに、当時の主要航路を明示し、それに朱印船航路を重ね合わせることで、日本町と同じく、南・東シナ海のダイナミズムの中に朱印船を位置づける一助となるように思われる。

#### Ⅳ おわりに

本稿では、日本町所在地と朱印船航路がどのように扱われているか、東京書籍、山川出版社、帝国書院から刊行されている、中学校歴史、高校日本史 B・世界史 A・世界史 B・地図（歴史的内容を含むもののみ）の教科書を比較して考察した。

日本町所在地について、中学校歴史、高校日本史 B、地図の全てと、高校世界史 A・B の多くは、戦前からの岩生成一の研究の大きな影響のもとにある。それらの教科書では 7 ないし 8 か所の日本町を提示しているが、アラカン、ディラオ、サンミゲル、ツーランについては問題がある。

一方、世界史 A・B の一部には、岩生の見解を離れ、日本町を特別視しないものもみられる。日本町をチャイナタウンやポルトガル・オランダなどの諸勢力の拠点都市と重ね合わせて地図に示すことが、日本町の理解としてふさわしい。

朱印船航路を地図で示す教科書は多数にのぼる。すべてではないものの、朱印状の宛先を渡航先と断定し、非常な遠方への航路が描かれたり、海禁下の明へ渡航するというありえない航路が描かれたりした例が多数ある。おもな航路を精選し、朱印船以外の主要航路と重ね合わせて表現することが望まれる。

日本町、朱印船は、日本と東南アジアの歴史的な結びつきを印象づけられるテーマである。ただし、世界史にとっては日本史との分断を、日本史にとっては一国史的陥穽を回避できなければならない。新科目「歴史総合」の教科書、授業実践が注目される。

## 注

- 1) 高校日本史 A は前学習指導要領以降、近代以降の内容になっているため、日本町と朱印船の内容は(通常は)教科書では取り上げられない。
- 2) 永積洋子『朱印船』吉川弘文館、2001、56-57 頁。
- 3) ①桃木至朗「東南アジア史：誤解と正解」(第 4 回全国高等学校歴史教育研究会資料) [http://www.let.osaka-u.ac.jp/toyosi/main/seminar/2006/momoki\\_honbun.pdf](http://www.let.osaka-u.ac.jp/toyosi/main/seminar/2006/momoki_honbun.pdf), 2006, 5 頁(2020 年 3 月 13 日検索)。  
②桃木至朗『わかる歴史面白い歴史役に立つ歴史：歴史学と歴史教育の再生をめざして』大阪大学出版会、2009、196 頁。
- 4) 久礼克季「朱印船貿易時代関連日本史研究および歴史教科書掲載地図におけるインドネシア部分の表記と場所について」環日本海研究年報 24, 2019, 40-52 頁。
- 5) 中学校は 2008 年公示, 2011 年実施。高校は 2009 年公示, 2013 年以降に実施。
- 6) 中学校は 1998 年公示, 2002 年実施。高校は 1999 年公示, 2003 年以降に実施。
- 7) 前掲 3) ②。
- 8) 岩生成一『南洋日本町の研究』岩波書店、1966 (初版 1940)。
- 9) 岩生成一『朱印船と日本町』至文堂、1978 (初版 1962)。
- 10) 前掲 8) 140 頁。
- 11) 近年の訪問記として、沖田英明『アラカンの黄金王都 ミャウーのキリシタン侍：ミャンマーの小西行長残党説』東洋出版、2013。
- 12) 岩生は日本町を「日本人のみ特定の地域に集団をなして一部落を形成する場合」と位置づけており、中高教科書とは定義のずれがある。前掲 8) 17 頁。
- 13) 清水はディアオ、サンミゲルについて検討し、1607 年に破壊されたディアオの再建は 1621 年と遅いこと、サンミゲル(1615 年～)は高山右近の関係者などわずかな日本人が住んだ地区で、「町」とはよべないことを論じている。清水有子「フィリピン(ルソン)の日本人居住地と日本町」環日本海研究年報 24, 2019, 9-16 頁。
- 14) ホイアンの研究史については、拙稿「ホイアン日本町の近代：近代日本の記憶の場として」歴史地理学 53(5), 2011, 23-40 頁。
- 15) 第 3 期国定教科書の『高等小学国史 下』(1927 年)以降、掲載されている。
- 16) 前掲 9) 118 頁。
- 17) 小倉貞男『朱印船時代の日本人：消えた東南アジア日本町の謎』中央公論社、1989。菊池誠一「考古学からみた「南洋日本町」」歴史学研究 677, 1995, 54 頁。
- 18) 表 1 では、東書『日本史 B』(旧版)のみ、朱印船渡航地として「ユエ」をあげているが、「フエ」と改めても問題である。朱印状には「順化」としてあらわれ、山川の各教科書では「ソンハ」と表記されているが、「順化(ソンハ)」は特定の港町を指すものではなかったと考えられており、現在のフエとよばれる都市は 17 世紀には存在しないためである。蓮田隆志「朱印船貿易・日本町関連書籍所載地図ベトナム部分の表記について」資料学研究 12, 2015, 43 頁。
- 19) ダナン Da Nang については、「ハンの河口」を意味する Cua Han がなまってツーラン Tourane になったと考えられている。一方、ホイアン Hoian については、フェフォ Faifo が Hoian pho (ホイアン町)から変化したか、ホイアンの異称 Hai pho (海府)に由来するかなど、諸説ある。
- 20) 前掲 2) 48-56 頁。
- 21) 前掲 2) 54 頁。
- 22) 中村拓『御朱印船航海図』日本学術振興会、1965, 194-196 頁。
- 23) 中島楽章「西洋渡航朱印状について」東方学 117, 2009, 19 頁。
- 24) なおこの 4 か所をあげるのは、次の岩生の著作の図に拠ったものであるかもしれない。岩生成一『続南洋日本町の研究：南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動』岩波書店、1987。
- 25) 蓮田は日本町について「日本人と何かしら縁のあった町」という定義を提案している。蓮田隆志「朱印船貿易・南洋日本町地図の再検討」環日本海研究年報 24, 2019, 4 頁。日本人の集住を大前提として、こうした緩い定義を導入することはありえなくはないが、17 世紀にあつては、傭兵や奴隷、脱出・追放キリシタンなど様々な理由で日本から移り住んだ者が東南アジアにはいた。彼らの集住地のうち、教科書の定義のように、交易面での「縁のあった町」を区別するのはありうる限定であると考えたい。すなわち、『主な』日本町所在地としてマニラ、ホイアン、ブノンペン、ピニャルー、アユタヤの 5 か所をあげるか、「日本町所在地」として(例えば)マニラ、ホイアン、アユタヤ「など」と示すのがふさわしいと考える。
- 26) 永積洋子「書評・紹介 岩生成一著『続南洋日本町の研究—南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動』」東南アジア歴史と文化 1, 1989, 128 頁。
- 27) 例えば、トンキン(ベトナム北部)への航路は海南(ハイナン)島の北か南かだけでも議論がある。前掲 18) 42 頁。また日本側の港を長崎だけとする教科書が多いが、坊津、鹿児島を加えているものもある。